



東北大学

平成 31 年度 一般選抜入学試験 個別学力試験  
出題意図(国語)

(国語)

前期日程

大問 一

・出題意図

「菩提樹のもとで」3音・時・言葉（『岩田慶治著作集 三』所収）からの出題です。この文章は人類学の方法論に関するものです。人類学には民族の文化を機能的に分析し、合理的に解釈する傾向がありますが、著者は、「音」から自然と文化の交流・交感・共存を感じることで、言葉に制約された分析・解釈を超える野外調査の可能性を指摘しています。本文は平易で具体的な記述が多く、理解しやすいと思われます。文章の内容について、それを正確に読み取る読解力と、字数制限内での確に自分の言葉でまとめる表現力を問うことが本問題の趣旨です。

・講評

問（一） 基本的な常用漢字の知識を問う問題です。おおむね良好な結果でしたが、ケアレスミスも少なくありませんでした。（5）では前後の文脈から判断すれば正解を導くことができたはずです。

解答（1）増幅 （2）排除 （3）滞在 （4）網目 （5）建立

問（二） 指示された箇所における著者の修辭的な表現の内容を問う問題です。村人と神を対比させることはおおむねできていましたが、楽器のどのようなはたらきが村人と神をともに喜ばせるのか、またどのような神なのかを書ききれていない解答が多く見られました。

問（三） 指示された箇所における比喩的な表現を正確に読み取り、的確に表現することが求められる問題です。「音の灯台」の意味を文脈に即して読み取ることでできない解答が目立ちました。

問（四） 指示された箇所が文脈の中で持つ意味を正確に理解し的確に説明できるかを問う問題です。問題文に使用されている文言をそのまま使用している解答が見受けられました。「深層において」や「交流」がこの文脈ではどのようなことを意味する

のかを自分の言葉で表現する必要があります。

問（五） 「岩にしみいる声」という抽象的な言葉に込められた著者の野外調査に対する態度について問う問題です。「出題意図」で示したような内容について、本文全体を参照し構成して解答する必要がありますが、本文の一部を抜き書きするにとどまる解答が多く見られました。

## 大問 二

### ・出題意図

小川洋子『ことり』からの出題です。限られた文章の微細な表現を通して、どこまで登場人物の心の動きを捉えられるかを求める問題です。文章そのものは比較的読みやすいと思われます。ほとんどセリフを発しない主人公「小父さん」の性格や心情の機微を把握するために、背景描写やエピソードの時系列等をふまえ、適切な言葉を選び簡潔にまとめるための読解力、構成力、語彙知識が問われる問題です。他の大問同様に、文章を着実に丁寧に読み込むことが必要です。

### ・講評

問（一） 文脈上の主語と齟齬をきたす解答や、本文中の類義語を流用したかのような解答が見られました。適切な言い換え能力が求められます。

問（二） ポイントは今までの窮屈な状態から解き放たれた安堵感・解放感にありますが、「小父さん」の異能への驚きや呆れを述べている解答が見受けられました。

問（三） 指示された箇所以前の文章から、「小父さん」の「狼狽」の理由を構成する複数の要素を読み取り、簡潔な文章にまとめることが求められます。読み取りができていながら、主述のねじれた解答が散見されました。

問（四） この問題はおおむねよく答えられていました。ただし、誰に関する「法則」なのかを明示できていない解答や、「法則」という言葉の特徴を適切に捉えることのできていない解答も見受けられました。

問（五） 「小父さん」と「お兄さん」との関係、「お兄さん」の死後の「小父さん」

の心情のこまやかな変化、「司書」の存在の意味をふまえたうえで、「小父さん」の目が外の世界に向けられつつある萌芽的な過程を適切にまとめることが求められる問題です。本文が十分には読み込めていないために、飛躍した解釈や「小父さん」の心情の描写としては極端と思われる言葉遣いも多く見受けられました。

## 大問 三

### ・ 出題意図

江戸後期の国学者沢田名垂の随筆『宿直物語』からの出題です。貧しい生活の中で、妻が夫の好む酒を買うために髪を売ったことがきっかけで、夫婦に破局が訪れるという話です。文中には特殊な語彙もありますが、全体としては平易で、比較的読みやすい文章であると思われます。基本的な古語および古典文法の知識をもとに、本文のストーリー全体のあらすじを読み取ったうえで、各設問でそれぞれ取り上げられている箇所文脈をふまえ、的確に解答する力が求められます。特に最後の2問の解答では、要点をおさえて自分の言葉で簡潔に内容をまとめる能力が問われます。

### ・ 講評

問（一） 古語および古典文法の知識を問う問題です。基本的な単語や文法についてはおおむねおさえられ解答されていましたが、一部に知識不足も見られました。また、口語訳の日本語に不自然なものがあることも気にかかりました。語句を口語訳する問題ではありますが、文脈を理解するとよりの確に解答できたのではないかと思います。

問（二） 文法的知識に加えて文脈理解が必要な問題で、注にあげられた古歌の主題を読み取れるかどうか重要なポイントになります。この問題は比較的よくできていました。しかし、設問にある「発言の根拠」に対する理解が不十分である解答、「かくて」の内容を「髪がなくなった状態」とする解答などが見受けられました。

問（三） 「さる」が指す直前の叙述の趣旨を把握することが求められます。「さる」に着目すればその直前の部分を指すことは明らかですが、女が男に早く寝るよう勧めたことをあげた解答が目立ちました。

問（四） この問題で、女が「あまりのあさましさ」を感じた原因を説明するためには、女が男のために髪を売るという犠牲を払ったことに言及したほうがよいのです。

が、それにはふれず、直前の男の言動のみを記述する解答が目立ちました。本文のかなり長い叙述をふまえて書く必要があるため、該当箇所を逐一訳すのではなく、自分の言葉でまとめることが求められます。

問（五） 男女一般の関係を問う問題なので、本文最後の語り手による批評に注目する必要がありますが、その点はおおむねよくできていました。批評文をそのまま訳すのではなく、その要旨を的確にまとめることが重要です。男女関係の維持の困難さを、文中の「くるし」「たのし」に着目しつつ整理することが求められます。

## 大問 四

### ・出題意図

明人李濂の『嵩渚文集』（巻五十二）所収「蔵書閣記」の後半からの出題です。「蔵書閣記」の前半では、明朝正徳・嘉靖期の政治にもたずさわった李濂の学問観や集書の経緯が述べられます。さて、この建物に寝泊まりしてまで蔵書の校訂作業をおこなっていた李濂は、或る時、二人の息子を呼びつけました。訓戒を行うことがその目的です。「蔵書閣記」の後半では、父親李濂の子らに寄せる期待が、読書環境をめぐる「古今」の相違を対比的に捉える構図のもと、三件の故事を交えながら情感を込めて描かれます。全体の文脈や一文の主旨は、訓点をほどこした出題文をその冒頭から丁寧に読み進めることによって、おのずから明らかになるでしょう。個別の小問では、文章読解において応用されるべき中国古典文（漢文）の基本文型ないし訓読の基礎知識をたずねるとともに、把握された一文の内容を的確に表現することを求めてもいます。なお、出題文の末尾近くの「人将……」句には上中下点を用いました。原則にしたがえば一二三点であるべきですが、文章読解の利便性を考慮して特にこのような表記法を採用しました。了解されることを願います。

### ・講評

問（一） 基礎的句法に関する問題です。正答率は全般に高いのですが、「由是」の訓読を間違える解答もなかには見られました。

問（二） 「聞こゆ」という動詞の意味のバリエーションや、「異日」語の持つ幅のある時間のなかから、出題文の文脈に相応しい意味を正確に記して欲しかったのですが、期待していたほどの正答率ではありませんでした。

問（三）（ア）「終身読之」句の上文「不必…」とのつながりが理解できず、直上の「集賢」にとらわれて「集賢殿の本」とする解答が、ままた見られました。

（イ）出題文全体が父親によるその子どもへの訓戒であることをふまえず、指示された箇所を一般的なたとえ話のように読んだ解答が少なからず見られました。「令名を得た者」とするものがその一例です。「二子」を、李濂の子どもではなく「弟子」とした解答の多さは、いささか不可解です。

問（四）「雖多」を間違える解答は比較的少なかったのですが、「奚以為也」に関してはその意味を捉えきれていない解答が見受けられました。なおこの箇所は、『論語』子路篇「子曰、誦詩三百、授之以政、不達、使於四方、不能專對、雖多亦奚以為」をふまえた表現であることを附言しておきます。

問（五）三名の学者の共通性を正確かつ簡潔にまとめたうえで、かれらに関する故事を李濂がその息子たちに語った意図についての的確に解答することが求められます。

問（三）（イ）に正答を記せなかった受験生の場合、この問題の正答からも遠ざかることとなります。出題文の一部を読んだだけでそこから全体の趣旨を臆測するような、いわゆる受験技術からの脱却を心がけたいものです。

## ○志願者へのメッセージ

本試験では、国語の基本的な読解力と的確な表現力を身につけた学生を選抜することを目指して作題を行いました。各問題は、①論理的な文章の内容と展開を正確に読み取る読解力、②文学的な文章の内容を正確に読み取る読解力、③古文・漢文についての基礎的な知識と読解力、④定められた字数の中で要点を的確に説明する表現力を評価する観点から作成されています。

現代文も古文・漢文も、本文の内容を正確に理解することが、なにより大事です。論理的な文章は、文章の構成や展開を意識しながら筆者の主張をとらえられるようにしてほしいと思います。文学的な文章は、文章中の人物の心情やそのことが描かれた状況を的確におさえられるようにしてほしいと思います。同時に、正確に理解した本文の内容について端的、かつ的確に表現できるように力をつけてほしいと思います。また、古文・漢文は、本文の内容を正確に理解したうえで、その内容を自然な現代日本語としてとらえ直す力も必要となります。テキストの細部をおろそかにせず、ことばの意味や表現に即して文意をたどれるよう、国語力を培ってほしいと考えます。